



高知県立
文学館

高知県立文学館ニユース

藤並の森

Vol. 78



アカレボかゝるたううだわ能く
ははるゝあにきくして言てあ
毎々新報を報有ううあるゝ
宜しく
僅病氣も此後愈せずあもレウ
マヤスで年足が痛んでおけぬぞ
おりのあ土佐より記るる
た寒くは著述も一て
のみと健康後は上るあ
つありだ、今後するは一切
土佐あふんる
あふんるは金くつて
た、あふんる

▲幸徳秋水写真(サイン入)と岡繁樹宛 幸徳秋水ハガキ(明治41年11月27日付)

リレー随筆

ある遺品の思い出

高橋 正

古い話である。昭和42年の暮れのある日、私は同僚のS先生と、安芸市在住、今は故人の岡直樹さん(明治18〜昭和45)という老翁を訪ねた。直樹さんは明治41年に渡米、米国の大学を出て印刷業などを営み、昭和30年帰国、自適の生活を送られていた。

私たちが直樹さん宅を訪れたのは、直樹さんの異色の実兄、岡繁樹さんの遺品を拝見させて戴くためであった。繁樹さん(明治11〜昭和34)は素行不良で高知一中(現追手前高校)を放校になり、家出同然で上京、従兄の黒岩涙香の『萬朝報』の社会部記者として活躍。先輩の幸徳秋水や堺利彦にかわいがられた。が、あるとき繁樹さんは同僚記者を撲つて首になった。秋水や堺の計らいで涙香も金を出してくれ、明治35年渡米した。サンフランシスコで印刷業や邦字新聞経営に腐心する一方、故国の秋水らの平民社に呼応して桑港支部を結成、秋水渡米(明治38〜39)の折には面倒を見た。大戦中は米政府に協力、反戦ビラを刷り、南方戦線で撤布、ジャングルに潜む日本兵の救出、戦争終結に尽力した。

直樹さん宅の二階の広間には、繁樹さんの遺品類、書画・古書・雑文書が山積みされていた。片隅の書架から白いパンフレット状の小冊子がチラッと顔を覗かせていた。表紙には大きな赤い文字で

「社会主義の詩」とあった。その瞬間、私とS先生の心臓は高鳴った。菊半截版、本文僅か31頁の小冊子だが、現存が確認されているのは二冊だけという超稀覯本。早速全国ニユースとして流れた。

この『社会主義の詩』堺利彦編 由分社 明治39、同43 発禁の表紙裏の「はしがき」に「社会主義如何なる人にも傳へなければならぬ」云々とあり、頒価は五銭、社会主義の宣伝の具として刊行されたようだ。だが、その内容からいつて未熟ながらもものプロレタリア詩の先駆的詩集として高く評価しなければならぬ。平民社に結集する秋水、堺、木下尚江、山口孤剣らの作品の他に、中里介山の反戦詩「亂調激韻」や、竹久夢二の短歌「繪筆折りてゴルキーの手をとらん」にわあまりに細きわが腕かな」などもあり多彩である。私とS先生は、直樹さんの快諾を得て『社会主義の詩』の原本から原寸大写真製版による複製本を刊行、実費で頒布、全国の好学諸賢から讃辞を得た。その後、原本は繁樹さんのご遺族(在米)が保管されている。

繁樹さん宛、秋水、堺、片山潜ら当時の錚々たる社会主義者たちの貴重な書簡、その他の遺品は岡家のご厚意により県立文学館にお預かり戴いており、ありがたい極みである。

(高知高専名誉教授)

会 展 覧 介 紹

高知県立文学館
開館20周年
特別企画

文学館の 文 祭

開館20年の軌跡と
その未来

平成29年
9月23日(土・祝)

11月12日(日)
企画展示室

観覧料400円



が文学に対する理解と教養を深め、県民の文化活動を支援するために高知県立文学館として、生まれ変わりました。

その際、本県出身の科学者であり文学者である寺田寅彦の業績を顕彰する「寺田寅彦記念室」も併設されました。

当館所蔵の資料としては、夏目漱石の直筆の書簡や絵はがきなど、全国的にも貴重な資料を含む寺田寅彦文庫の他に、宮尾登美子文庫、大江満雄文庫、浜本浩文庫、直木賞作家の小山いと子文庫、『坂本龍馬全集』を出した作家の宮地佐一郎文庫、片山敏彦文庫など20余りの文庫や独立したコレクションなど約6万点を所蔵し、地域の文学館としての役割を果たしています。

高知県立文学館は、高知城の東側に位置する、山内家ゆかりの藤並の森に建てられ、外壁に桂浜で有名な五色の石を埋め込んだ石造りの建物です。

以前は、郷土文化会館として、美術展や歴史展などを幅広く開催し、県民の皆さまに親しまれてきました。

1991(平成3)年には、南国市岡豊に高知県立歴史民俗資料館が、1993(平成5)年には、高知市高須に高知県立美術館が新設されたことにより、この施設は、1997(平成9)年県立文学館となりました。本県ゆかりの文学者の資料を調査、収集、保存及び展示を通して、それらの作家の業績を顕彰するとともに、県民

また、当館は「紀貫之から有川浩まで」のキャッチコピーでご紹介しているように、古典から現代文学まで、約60名の作家や文学について、幅広く取り上げています。

とりわけ、古典では、江戸時代以降に出された『土佐日記』の板本、写本、研究書などの関係資料は、大変充実したレベルの高い内容となっており、全国的に近代の文学館が多数を占める中、異彩を放っていると思います。

そして、文学館が資料の蒐集とともに力を注いで来た展示では、高知の文学を紹介する常設展や特別展のほかに、日本近代文学館をはじめとする全国の文学館のみならず、博物館や企画会社などにもご協力いただき、石川啄木、夏目漱石、芥川龍之介、川端康成などの個人展、

詩歌、俳句、海外作家の児童文学や絵本原画展、近代文学さらには、こうした分野を超えたテーマ展など、これまで百以上の企画展を開催するとともに、展示内容にあわせて講演会、朗読会、ワークショップなども開催し、文学の裾野を県下に広げるための普及活動を展開してきました。

今回は、開館20年を記念して、所蔵している貴重なお宝資料を一挙大公開。文学館のキャクチャー、しおりちゃんと筆太がタイムスリップし、「過去・現在・未来への文学の旅」にご案内します。

展示構成としては、展覧会場を「高知県立文学館開館20年の軌跡とその未来」と位置付けます。

一、高知県立文学館を知ろう

高知県立文学館開館20年の歩みを音楽と共にご紹介します。

階段には、1997年〜2017年までに開催された100を超える展覧会の中から、代表的な展覧会のポスターを掲示します。

2階ロビーには、山本一力、藤原緋沙子、嶋岡晨、中脇初枝、畠中恵、西村繁男といった作家の方々からのメッセージをご紹介するとともに、高知県立文学館の設置目的やその歩み、全国の文学館設立の歴史などをパネルでご紹介します。

二、企画展示室

企画展示室内では、当館所蔵のお宝を年代順にエピソードを交えながら、ご紹介いたします。たとえば、平成20年に寄贈された寺田寅彦(ペンネーム 吉村冬彦)の原稿「学位に就て」「試験管」などは、当時の鎌倉文学館から「寺田寅彦の原稿は、故郷である高知へ」とご協力のもと、高知県への寄贈が実現しました。

他にも、寺田資料に関しては、寺田寅彦宛夏目漱石書簡や絵はがき、石原純宛書簡など、貴重な資料を数多く所蔵しています。

また、馬場孤蝶宛ての与謝野寛・晶子からの書簡には「馬場先生の歌、俳、書、画、いづれも専門家以外の地歩に立つて、久しく獨自の妙を示されてゐる」とあり、二人がいかに孤蝶を評価していたかを見ることが出来ます。

1902(明治35)年頃から、孤蝶と夫妻との交流は始まります。館には、年月日不詳の手紙が多いですが、確定できるものとしては1913(大正2)年6月25日付けの寛書簡から1922年(大正11)年11月18日付けの晶子書簡が所蔵されています。



▲伊東彊自宛寺田寅彦ハガキ

会 覧 展
紹 介
EXHIBITION

高知県立文学館
開館20周年
特別企画

文学館の
文化祭

開館20年の軌跡と
その未来

平成29年
9月23日(土・祝)

11月12日(日)
企画展示室

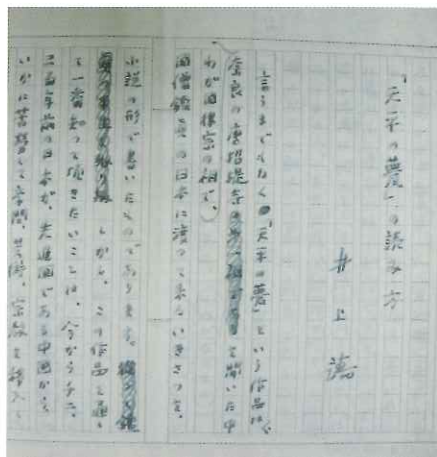
観覧料400円

☆展示解説

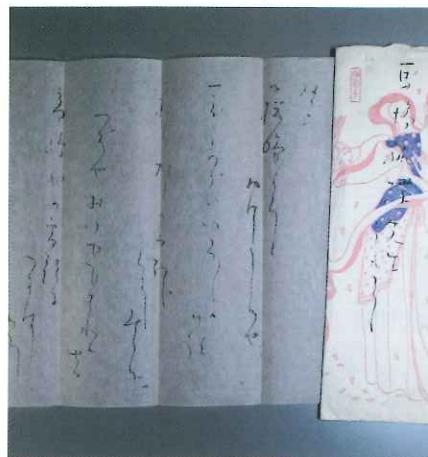
展示会担当者による
展示解説を行います。

毎週土曜日

各日とも午後1時半～
(約30分)
参加には当日観覧券
が必要です。



▲「天平の蜚」の読み方 井上靖原稿



▲馬場孤蝶宛 与謝野晶子書簡

他にも、初公開の資料として、幸徳秋水、志水辰夫に関する書簡や原稿など、また、20周年を記念して、十数年ぶりに公開する川端康成や井上靖、安岡章太郎関連の寄贈資料、有川浩の各種の賞状やトロフィーなどもご紹介する予定です。



三、未来に向かって

ここでは、これまでの軌跡から、文学館の未来について、考えてみたいと思います。例えば、開館当初は、資料に語らせる展示が推奨されていましたが、最近では、体験型の展示も求められつつあります。

ジャンルの枠にとらわれず、幅広い層に親しまれ、生き生きと活動する文学館であるためには、多くの資料の活用にあたり、質の高い内容も保ちつつも、お客様のニーズを加味しながら取り組んでいくことも必要です。

開館20周年の年、高知県立文学館は、未来への第一歩を歩みだします。

今後とも、宜しくお願いいたします。

(学芸課長/津田加須子)

◆関連企画のご案内◆

■文学散歩 文学館カルチャーサポーター作成の『文学探索徒歩図』とともに

- ・日 時：10月8日(日) 午前9時～11時30分
- ・場 所：文学館周辺の文学碑や寺田寅彦記念館などを歩いて巡ります。
- ・定 員：30名(電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。)
- ・参加費：観覧料及び保険料(500円)

■文学散歩 宅間一之先生と巡る 土佐れきぶん散歩「お城下の歴史と文学に会う」

- ・日 時：10月15日(日) 午前9時～12時30分
- ・場 所：文学館周辺の歴史碑・文学碑を歩いて巡り、土佐の幕末・維新の文学と歴史にふれます。
- ・定 員：30名(電話又は文学館受付にて事前にお申し込みください。)
- ・参加費：観覧料及び保険料・昼食代(2000円位)

■「耳和ぐ」参加者が朗読、紙芝居、絵本など大好きな作品を発表する参加型のイベントです。

- ・日 時：①10月21日(土)、②10月22日(日) 各日 午後2時～4時
- ・場 所：①21日：文学館1階ホール、②22日：文学館 玄関前
- ・内 容：①21日：朗読 ②22日：読み聞かせ・紙芝居等
- ・募集締切：8月31日(木) 必着
- ・参加費：無料

■木洩れ日コンサート「風の舞」

- ・日 時：11月3日(金・祝) 午後2時～3時
- ・場 所：文学館前 藤並の森(雨天時、高知県立文学館1階ホール)
- ・演 奏：音の文化振興会のみなさん
- ・定 員：なし
- ・申 込：不要(当日会場までお越しください。)

他にも多彩な関連企画を用意してお待ちしています。

展覧会報告!



青春18きっぷ

ポスター紀行 【東京写真月間 巡回展】

6月3日(土) から開かれました当館20周年記念特別企画展「青春18きっぷ」ポスター紀行。

「あの一枚が、あなたを旅人にした。」

鮮やかな青春18きっぷのポスターを73点展示した本展では、文学館ならではの試みとして、鉄道関連の書籍や、職員が旅の際に携行した小説を普段のハードカバーではなく、旅に携行しやすい文庫本で紹介しました。また、本の紹介パネルを駅の電光掲示板風に、観覧チケットは旧国鉄時代の硬券をモチーフにするなど、本物が感じられるよう、細部にもこだわりました。展示場への導入部分には、天然写真家・前田博史さんに撮影していただいたJR予讃線下灘駅の写真を掲示しました。また、高知県在住の鉄道愛好家の皆さんご協力のもと、懐かしの列車模型が、高知県らしい風景を再現したジオラマ内を走行しました。列車模型の車窓から見える景色に思いを馳せながら、何時間もの様子をご覧になっているお客



▲駅構内をイメージした展示室にずらりとポスターが並ぶ



▲展覧会主担当者によるギャラリートーク

様の姿がとても印象的でした。「ポスターの駅に実際に行ってみたくなった」「無料の企画展とは思えない充実ぶり」と、嬉しいお言葉もいただき、予想外に多くのお客様にお越しいただきました。

関連イベントでは前田さんを迎え、写真教室とフォトコンテストを開催。コンテストの応募作品は館内に掲示させていただき、お客様は、その1枚1枚を興味深そうにご覧になっていました。

「写真・鉄道・旅と文学」に対する多くの方々の熱意が新たに人と人をつなぎ、皆様のご協力があったからこそ実現した本展。私は本展の一担当として、貴重な資料と大切なお客様を繋ぐ一役を担いました。本展の開催に際しまして、東京写真月間主催者様、JR各社様をはじめ、ご協力をいただきました関係者各位に対しまして、職員一同、心より御礼申し上げます。

(総務事業課/妹尾佳奈)



館長室から

「青春18きっぷポスター紀行」雑感

岡崎 順子

6月25日、「青春18きっぷポスター紀行展」が終わった。県内外から、多くのお客様に来館いただいたが、中でもバックパックを背負った若者や、鉄道マニア、旅行好きの年配のご夫婦など、普段あまりお見かけしない方々の来館をいただいたことは、大きな励みになった。この方々は、もちろんポスターをご覧になるのだが、キャプションにもじっくりと目を凝らし、笑いながら会話を交わしつつ、それぞれのスタイルでゆったりした時間を過ごされていた。それはあたかも、お一人お一人が、展示を通して、ご自分の旅の思い出と会話をしていたようであった。

かく云う私も、学生時代は、授業とアルバイトの時間をやり繰りして、リュックサックを背負い、格安の鉄道きっぷを利用して日本各地を旅して歩いたものだ。まさしく「前略、僕は日本のどこかにいます」(予讃線)的な自由を満喫したことが懐かしい。

今回、一つ一つの展示を見ていると、40年近くの時を超えて、その風景のみならず、音や空気、彩り、匂いなどがよみがえり、いつのまにか想い出に浸っていた。「言葉の力」だ。

卒業してから社会人となって過ごした長い年月。これからは「ゆっくり行くから、見えてくるもの」(室蘭本線)を見つけて、まだまだ旅を楽しみたいと思う自分がある。

リアルな戦後風景 ― 長山高之の「夏の日」など ― 猪野 睦

時代の流れは早い。一九四五年敗戦前後生まれも70歳をこえた。当時の少年少女も80歳なれば、当時を生きた大人はもういない。高知市の焼野原やそこからの立上り、復興を語れる人はどれほどいようか。それが文学作品として記録として残ってきたらうか。

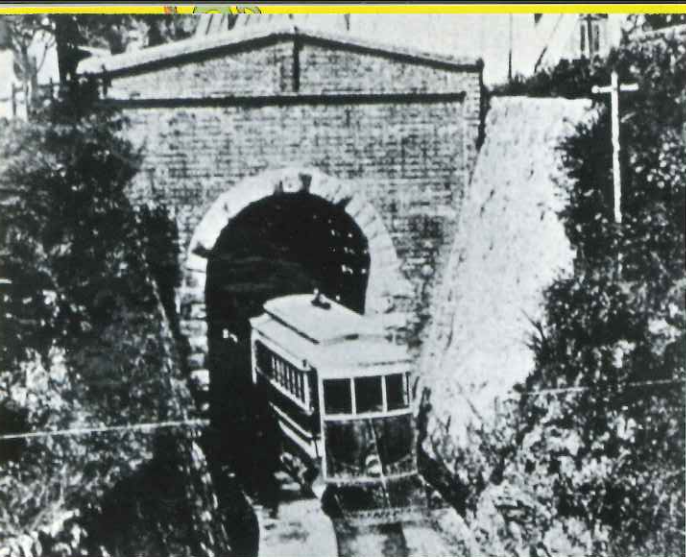
そんななかで本格的な高知市の敗戦前後の現実を描出してきた作家に長山高之がいた。長山は一九二七年生れ。少年時代、大阪の間屋で丁稚奉公をしていたが、店もたたまれ高知へ帰ってくる。そして土電電車の少年車掌になり運転手となった。先頃、大阪で90歳で没したが、少年車掌、運転手として過した日々を、空襲で廃墟となった高知市現実光景を、そこで暮す人々の窮乏とともに作品化した。その暗い時代に恋も織りこんだ青春小説でもあった。

「夏の日」「春遠き日々」「レッドパージ」「故郷はるかなり」などの長編力作をかき単行本となった。「赤旗」「文化評論」などの評判作だった。

戦争末期になると男子従業員は召集、電車の車掌、運転手も県下から集められた女子挺身隊員が電車を動かした。男は戦闘帽にゲートルをまき、女は鉢巻きモンペ姿の産業戦士となった。当時の電車運転台は古い型のドアのない吹きさらしだった。

そんな時代、電車は下知車庫をで、西は疎開家屋とりこわしの升形を通り、五丁目、蛸橋、そこから狭い単線の朝倉、四十四連隊兵舎前を通り唼内坂をへて伊野町へ。東は天津、妙見をへて後免へ。そして市内は棧橋へ、下知から堀川の機帆船発着場と、その裏通りの下の新地といわれた場へ通じる新地線があった。高知市の交通は電車でありたっていた。

そこへ7月高知空襲、8月敗戦がくる。残っていた男子従業員は連日、電柱を集め、焼跡に電柱をたて、焼けた軌道復旧、送電が始まり電車が走ったのは二か月後の9月になってだった。その時代の窮乏生活、ようやく民主化が始まり労働組合も結成されていく。巷では闇屋の横行、食糧不足、インフレ進行、復員者であふれる町。そんな時代の男女従業員の青春の日々を克明に時代とともに希望へむけてかきあげた青春小説でもあった。城下町の空襲前の電車から見える街の描出、群れる赤トンボを割って進む運転台からの秋の光景なども今は幻である。(詩人)



▲昔の唼内坂トンネル入口 (画像提供/とさでん交通株式会社)

資料受贈報告

― 寄贈資料から ―

「うたものがたり」

大江満雄著 寶雲舎刊
1947(昭和22)年2月
208頁
西村光一郎氏寄贈



大江満雄(1906～1991)は詩人。明治39年7月24日、幡多郡奥内村(現・大月町)生まれ。キリスト教的思想を基調とした人間愛に満ちた思想的叙情詩を書き、人生派詩人として活躍した人物です。

『うたものがたり』は、1947(昭和22)年に出版された創作童話集で、萬葉集を基にして作られた全21話で構成されています。大江は詩やエッセイ等を数多く発表しておりますが、童話総数は比較的少なく、本書は童話作品の中で唯一の童話集です。大江は本書を「新作むかし話」とし、「子供にとつてたいせつな、よい社會を創つてゆく力となる、純心な、のびのびとした童話をお話したいのです。むかしの人のお話はお話として、今の考へ方で、よい童話をつくつて、みんなが話しあつてゆきたいのです。」

受贈報告(平成29年3月～6月) 敬称略

- ▼伊東眞里子・「伊東眞白あて寺田寅彦書簡」他
- ▼中脇初枝・「みなそこ 中脇初枝著 新潮社刊」
- ▼森下一仁・「怪星の秘密―森下雨村空想科学小説集― 森下雨村著 書肆盛林堂刊」
- ▼林嗣夫・「新・日本現代詩文庫134 林嗣夫詩集 林嗣夫著 土曜美術社出版販売刊」
- ▼楠瀬勉久・「詩集 SHORT STORY POEMS 晩春は 根津真介著刊」他
- ▼鈴木義夫・「詩集 鯛を焼く 鈴木義夫著 ふたば工房刊」
- ▼宮地たえこ・「槇山のそら 宮地たえこ著刊」
- ▼普光江秀子・「小説集 光の帝国 普光江秀子著 吟遊社刊」他
- ▼山中節子・「童話集 ひみつの箱 山中節子著 藤本知子・絵 馬酔木舎刊」
- ▼日本現代詩人会・「詩集 言葉について 中村稔著 青土社刊」他

「おうちのかたがたに、いろいろ尋ね、自己の批判をたしかめることは、たいへんよいことです。それから、おうちのかたがたは(中略)いろいろと補助して子供へ判りやすく話して下さることを、とくにお願いします。」

と書いており、未来を担う子ども達の成長を期待し、童話を通して温かく見守りたいという思いが見て取れます。

今回、寄贈下さった西村光一郎氏は、全国詩誌「日本詩壇」等で活躍した詩人・西村和三郎氏のご令息で、本書は大江から和三郎氏に贈られたものです。

表紙の見返し部分には、「西村和三郎様 著者と墨書されており、大江と和三郎氏との親しい交流が窺えます。(学芸課/檜垣佳甫)

常設展虫めがね



シリーズで、変わる常設展示をご紹介します！

高知県立文学館では、いつまでも新しい発見、新しい体験をしていただけるよう、展示入替を行っています。
今年度は「自由民権」コーナー・中江兆民、「反骨の大衆文学」コーナー・田岡典夫、「現代の文学」コーナー・田宮虎彦、「近現代の詩歌」コーナー・若尾潤水をご紹介します。

展示作家紹介 中江兆民

中江兆民は明治時代に活躍した思想家、ジャーナリストです。

1847(弘化4)年、高知市に生まれ、藩校文武館で細川潤次郎らに学びました。同じ頃、奥宮熾斎に禅の思想が色濃く混じった陽明学を学んでいます。

兆民が洋学を学んだ細川は、1852(嘉永5)年にアメリカから帰国したジョン万次郎から英語を学んだ一人です。のちに兆民は土佐藩の長崎留学生に推挙され、そこで坂本龍馬と出会い、龍馬に頼まれてしばしば煙草を買いに行ったそうです。明治に入り、大久保利通に会って「民間の書生も採用せよ」と説得、司法省に出仕して刑法学専修の身分となりフランス留学を実現させた話は有名です。帝政瓦解後のリオンでは民主主義思想に深く感化されました。

その後、日本文学に影響を与えた美学の翻訳『維氏美学』、思想の異なる二人の問答を軽妙に描いた『三酔人経綸問答』などを執筆します。ルソーの『社会契約論』の訳『民約訳解』は社会に大きな影響を与え、東洋のルソーと称されました。

1888(明治21)年に「東雲新聞」主筆となり、1890(明治23)年には衆議院議員第1回選挙に大阪より立候補し当選。しかし自由党の堕落ぶり

等に失望し、「アルコール中毒で歩くのが困難なため採決の列に並べない」という、なんと兆民らしい皮肉で辞表を提出し政界から遠ざかります。

その後生活の困窮のために節を枉げたくない^まと実業に従事しますが、失敗。1901(明治34)年喉頭がんで余命宣告され、『一年有半』を執筆。政治批判の他「余が郷里又楊梅有り、今方さに其候也」など、郷里の食についても記しています。さらに最後の著作であり兆民の哲学の集大成となる『続一年有半』を書き上げ、12月13日に東京小石川の自宅で没。55歳でした。

今回は「志国高知 幕末維新博」の関連展示です。弟子の幸徳秋水に与えたとされる色紙「文章経國大業不朽盛事」等も展示しています。「文章は国家を治める大事業で、永久に朽ちない盛大な事業である」という言葉の通り、文筆の力で世の中を良くしようと奮闘した兆民の姿が、執筆された著作の数々と直筆資料を通して皆さんに伝わればと思います。
(学芸課/川島禎子)



▲展示風景

トピックス

小さなお子様連れでも
快適な文学館に！
授乳室が出来ました♪



乳幼児をお連れのお客様から多くのご要望がありました授乳室をこの度設置することができました。場所は、1階「こどものぶんがく室」にあり、授乳用の専用ベンチも置いて、ベビーカーと一緒に土足のままでご利用いただけるようになっていきます。部屋にはピンクのカーテンで間仕切りもできるようになっていきますので、安心してご利用いただけると思います。
(副館長/猪野満)

平成29年度第20回 児童生徒文学作品 朗読コンクールの お知らせ

高知県立文学館では、「第20回児童生徒文学作品朗読コンクール地区審査」を平成29年8月より、県下3会場にて行います。全国的にも珍しい全県を対象とした小中学生の朗読のコンクールも文学館の開館と共に20回目の節目を迎えました。今年の特別審査委員は『にちよういち』をはじめ、数々の絵本を世に送り出してくださっている高知県出身の絵本作家・西村繁男先生をお迎えします。

小学生の時から、毎年出場してくださる生徒さんが、中学生になって大人らしい雰囲気^{きふく}の朗読をするようになる姿を見ると、彼らの成長の傍に朗読コンクールがあるということがとても嬉しくなります。表現力や読み方も、小学生から中学生になると、幅が広がったり、深みが増したりして、「心も育っているんだな」と感じます。また、新聞やテレビなどで出場した生徒さんが活躍している姿を拜見すると、「色々なことを頑張っている、すごい」と思います。児童・生徒の皆さんの熱い朗読の夏、ぜひ応援にいらしてください。

(学芸課/谷岡真衣)

◆地区審査(公開)

- ・西部会場(大方あかつき館レクチャーホール)
8月18日(金) 午前10時30分～
- ・東部会場(田野町ふれあいセンター多目的会議室)
8月21日(月) 午前10時～
- ・高知会場(文学館ホール)
8月23日(水) 午前9時～

◆県審査(公開)

表彰式・記念講演会があります。

会場:高知県立文学館ホール
日時:11月12日(日) 午後1時～

お問い合わせは朗読コンクール担当まで
(TEL:088-822-0231)



展覧会レポート

長谷川義史の
『いいから』
世界展

家族みんなでおいでや〜

高知県立文学館では、毎年、夏休み期間に親子で楽しめる展覧会を開催しています。

今年は「いいからいいから」シリーズなどで人気の絵本作家・長谷川義史さんの原画展を好評開催中！
ゆたかで、どこか懐かしい長谷川さんの絵本の世界をこの機会にぜひお楽しみください！



長谷川さんは1961(昭和36)年、大阪府藤井寺市生まれ。グラフィックデザイナー、イラストレーターを経て2000(平成12)年『おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん』で絵本デビュー。これまでに100冊以上の絵本を出版し、受賞も多数。作品と同様の優しくあたたかな人柄で子どもから大人まで多くの人を魅了し続け、創作活動のかたわら、テレビ出演や、観客と交流しながら読み聞かせをする「絵本ライブ」が評判となり、全国各地でひっぱりだこです。

本展では、人気シリーズ「いいからいいから」のほか、ご自身の体験をもとに描かれた『てんごくのおとうちゃん』、平和への願いが込められた『へいわってすてきだね』『ユーモアたっぷり』『大阪うまいものうた』



▲展示室の様子

といった約80点の絵本原画、下絵や道具類、長谷川さんの思い出の品、愛用品を集めた「秘宝」などを一堂に展示。絵本に描かれた昭和の風景を再現したジオラマ、大きな「いろはかるた」や「福笑い」などの体験型コーナーも設け、多彩な角度から絵本が生み出された背景、創作の秘密に迫っています。

会場にお越しになったお客様は、ジオラマを見てパツと表情が明るくなり、長谷川さんが当館へ向けて描いてくれた直筆メッセージにくすつと笑い、展示室で心ゆくまで原画に見入っています。また、今年も展覧会を彩るたくさんの方の関連企画を用意しており、大変好評をいただいています。

そのひとつで、7月15日(土)に開催された「長谷川義史絵本ライブ & サイン会」では長谷川さんをお招きし、愛媛県や徳島県からも駆けつけた約130名のお客様と楽しいひとときを過ごしました。お客様と話しながらいきなりサラサラと絵を描き、歌う長谷川さんに会場は大いに盛り上がり、その後のサイン会は長蛇の列となりました。

本展のメインタイトルにもなっている「いいからいいから」は、長谷川さんが「せかいをへいわにするほんきのあいことば」として大切にしている言葉でもあります。この言葉には、他者の行動を否定せず、自分を縛ることもしない長谷川さんの強い思いが込められています。この「一見軽やか、でも奥深い」というスタイルが長谷川さんの魅力のひとつでもあります。

家族の絆、人とのつながり、クスリと笑って心に沁みる。日々の暮らしのなかで、私たちが置き去りにしているものにそっと気付かせてくれる長谷川義史さんの絵本の世界。この夏は、文学館でそんな「長谷川ワールド」をお楽しみください。(学芸課/福富陽子)

9月10日(日)
まで開催！

いいから いいから
～長谷川義史の世界展～

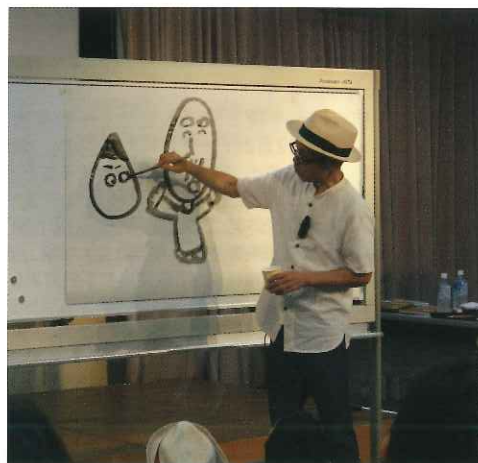
場所：企画展示室 観覧料：500円

■クイズイベント■ … 8月26日(土)、9月9日(土)
各日とも9時～16時

当日の観覧券が必要となります。

他にも工作イベントやおはなしキャラバンなどございます。
詳しくは展覧会チラシをご覧ください。

▶絵本ライブの様子



企画展
案内

いいから いいから ～長谷川義史の世界展～

2017 7/8(土)～9/10(日) 場所:企画展示室 観覧料:500円
(平成29年)

ダイナミックな筆致とユーモアあふれる言葉で、子どもから大人まで魅了している長谷川義史さん。貴重な原画や下絵、日記、秘蔵コレクションの他、絵本の中の長谷川家を再現したジオラマなどを展示して長谷川さんの絵本の魅力を紹介します。

展覧会の紹介をしています！ 詳細は7ページをご覧ください。



©長谷川義史/絵本館、BL出版



高知県立文学館 開館20周年特別企画

文学館の文化祭

2017 9/23(土・祝)～11/12(日) 場所:企画展示室 観覧料:400円
(平成29年)

2017年11月に開館20周年を迎える高知県立文学館。この節目の年に、所蔵しているお宝を一挙大公開。初公開の資料をはじめ貴重な資料を展示します。

展覧会の紹介をしています！ 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。

高知県立文学館は11月で開館20周年を迎えます。

11/3 金祝 9:00～17:00

ありがとうございます感謝をこめて、
無★料★開★館

11月3日(金・祝)～5日(日)には、「文学館まつり」を予定しています！

11月3日(金・祝)

- ・20周年記念セレモニー (9:30～10:00)
協力/くるみ幼稚園の皆さん
- ・屋台 (10:00～16:00)
文学館らしい屋台でおもてなし♪
- ・お茶接待 (10:00～16:00)
先着で「お茶(抹茶)」をご提供！
- ・言葉集めラリー (9:00～16:30)
お城下をめぐって景品をゲット！
- ・展示解説 (4コース)
めざせ、「文学館はかせ」!!

11月4日(土)

- ・おはなしキャラバン特別編
～みんなおいでよ！紙芝居、語り、演劇～
(13:00～16:00)
県下の紙芝居、語り、演劇などのサークルや個人が一堂に集います！
- ・言葉集めラリー (9:00～16:30)
お城下をめぐって景品をゲット！
- ・展示解説 (4コース)
文学館スタッフがコースにあわせて解説をします。
めざせ、「文学館はかせ」!!

11月5日(日)

- ・漱石自筆絵はがき+寅彦画展示!!
(9:00～17:00)
この日だけ！貴重な寅彦資料を公開♪
- ・覗いてみよう！～本のリサイクル～
(10:00～14:00)
本の里親になってください♪
- ・お茶接待 (10:00～16:00)
- ・言葉集めラリー (9:00～16:30)
- ・展示解説 (4コース)
めざせ、「文学館はかせ」!!

※内容によって、当日観覧券が必要な場合がございます。詳細はHP・チラシをご覧ください。

利用案内

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)
休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。
※その他メンテナンス等で臨時休館することもあります。
- 観覧料 一般360円 企画展はそれぞれ異なります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下無料、
高知県・高知市長寿手帳、身体障害者手帳、療育手帳、
精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳および被爆者
健康手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。
なし。ただし近辺に有料駐車場があります。
- 駐車場 無し。
- 附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、
茶室「慶雲庵」
- 貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス<県庁前行>
「高知駅前」下車、北へ徒歩5分または
「高知駅」>「はりまや橋」下車、徒歩20分
- JR高知駅下車、徒歩20分(または連絡バス・路面電車を利用)
- 路面電車「高知駅前」下車、北へ徒歩5分
- バス停「高知駅前」下車、北へ徒歩5分

高知県立
文学館〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857E-mail: bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bungaku.com

フェイスブック好評配信中!

Facebook: https://www.facebook.com/kochi.literary.museum

